

〈エクソダス〉2011 通信 8

沖縄セミナー・2011 第2回

「72年日本『復帰』——^{ヤマト}本土からの『応答』の軌跡」(6/18) での論議を振り返る

「自己決定権の樹立」という新たな地平に立とうとする沖縄の人々と、ヤマト(本土)の私たちがいかに連帯するのか。そのことをテーマとして、「生・労働・運動ネット」は、富山平和運度センターとの共催で、今年5月から、「沖縄セミナー・2011 in 富山」を進めています。

6月18日(土)、「沖縄セミナー・2011」の第2回として、ヤマトでの沖縄をめぐる社会運動の思想・軌跡を主要なテーマの1つとして研究活動を行っている、立命館大学大学院生の大野光明さんをお話しに迎えて、表記のような学習会を行いました。以下、そこでの大野さんの話や、その後の「フリートーク」での論議のアウトラインを紹介します。

ヤマトの沖縄への「応答」の未完の可能性を探る ——大野さんの話から

日本「復帰」運動への「応答」の中で何が忘却されてきたのか

今日は、沖縄の日本「復帰」前後の時期を中心に、本土での運動が、沖縄での闘いをどのように受け止め、「応答」しようとしてきたかを中心的なテーマとして、お話ししたい。

第2次大戦後間もない時期の沖縄では、アメリカによって沖縄が旧日本軍から「解放」されたという捉え方もあったようだ。しかし、米軍による直接統治下の過酷な状況の中で、早くも50年代初頭には日本「復帰」を求める動きが登場しているが、その後、1960年には、日本「復帰」を実現する上での大きな推進力を発揮した、「沖縄祖国復帰協議会」が結成されている。50年代の沖縄の日本「復帰」運動を当時の文章を通して眺めてみると、「私たち沖縄の人間は『日本人』であり、祖国復帰運動は、沖縄という日本の『国土』を『日本人』が守る闘いだ」といった、ナショナルな心情を喚起して、本土の保守政権の支援を求めようとする言葉であふれている。しかし、結局、当時の本土の親米的な保守政権の冷淡な反応に対して沖縄の人々は大きな失望を味わうことになり、「祖国復帰協議会」は、60年代に入ると一転して、社会党や共産党、総評といった「革新勢力」に接近していった。

日本「復帰」運動を推進した沖縄の人たちには、「日本国民」になることで、米軍統治から解放されて、日本の法の保護の下で人間としての尊厳や、平和な暮らしが保障されるという切実な思いがあったように思う。一方、50年代から60年代前半までの日本本土の社会運動では、沖縄は本土の人々にとって完全に忘却された存在になっていた。例えば、あれだけ全国的に高揚した60年安保闘争の中でも、沖縄について言及されることはほとんどなかった。

そのような状況の中で、本土の運動の中にしだいに登場してきたのが、「沖縄を返せ!」という発想だ。その当時の運動の中でよく歌われた「沖縄を返せ」という歌は、50年代の初めに「歌声運動」が盛んだった頃に、福岡

で作られたものだ。ヤマトの私たちが「沖縄を返せ」と無邪気と言うわけにはいかないと思うが、この歌が盛んに歌われた当時でも、「沖縄を返せ」と叫ぶ主体が、沖縄か、それとも、ヤマトかがあいまいであることに、違和感もたれていた。いずれにせよ、この歌では、当時の反米的なナショナリズムと、沖縄の人々の米軍支配からの解放を求める思いとの両方が未分化な状態で混在しているという点で、当時の沖縄をめぐる運動のあり方を、象徴するものではないかと思う。

沖縄の「祖国復帰協議会」の運動を推進していった喜屋武(きゃん)真栄は、「復帰運動は主権回復の運動」であり、「われわれ沖縄百万人県民は、一億同胞の先頭にいま立って、日本民族の独立と平和の運動を展開しておるのだという誇りを堅持する」と主張している。それでは、60年代の本土の知識人の多くは、それにどう「応答」したかという、そのような発言にただ無批判・無自覚的に追従していただけだというのが、実情だった。

例えば、岩波書店の月刊誌「世界」の「〈アンケート〉沖縄の本土復帰に関する意見」の中で、マルクス主義経済学者の大内兵衛は、「沖縄は本来日本の領土である。日本も戦争に負けたが、本来の領土を回復する志は失わない」と書いている。そのように、当時の沖縄をめぐる運動は、「主権回復」や「民族」という概念を持ち込んで本土と沖縄を結びつけることで、アメリカに蹂躪されているもの同士としての連帯を語るという、被害者意識に基づく「国民運動」という性格が強かったように思う。

しかし、そうした心情的なナショナリズムに囚われることで、沖縄とヤマトとの関係性が、「日本国民」という狭い枠組みの中に押し込められてしまう。何よりも、同じ「日本国民」だという語り口によって、戦前・戦後を貫いて、ヤマトが沖縄に対してどのような暴力や抑圧を行使してきたのかという「問い」が、忘却される。それは、同時に、日本が沖縄の外に広がるアジアの国々に対して行使してきた植民地主義的な暴力を忘れ去ることもつながっているという意味で、いわば「二重の忘却」を生み出している。それは決して、過去のことでなく、今でも私たちに問われ続けていることであるように思う。

ベトナム反戦運動の中での沖縄からの「告発」

60年代末の日本のベトナム反戦運動を象徴するものとして、「ベ平連」(ベトナムに平和を！市民連合)がある。あえて単純化して言うと、労働者や学生による社会運動というのではない、「普通の市民」が参加できるような社会運動として日本で初めて成立したのが、ベ平連だった。また、ベ平連は、運動体の綱領もなく、登録されたメンバーもない、あくまでも、誰もが自由に提起してやりたいことをやるという運動であったという意味でも、画期的なものだった。

ベ平連の活動家だった鶴見良行は、ベトナム反戦運動を進めていく過程で、「60年当時には、守られるべきものだった日常的な市民生活が今では否定されるべきものとなった」と、言っている。そのように、日本の国内や沖縄の米軍基地から直接ベトナムに向けて米軍が出撃し、日本の企業も米軍の軍事行動を様々な形で「後方支援」しているという構造の中で、私たちの日常生活それ自体がベトナム戦争を支えているという認識が共有されるようになっていった。

そうした自らの加害者性への認識を通じて、ベトナム反戦運動が、沖縄に出会っていく。つまり、ヤマトが沖縄に米軍基地を押しつけているという加害者性が、日本がベトナムに爆弾を落とす側にいるという加害者性にそのまま直結している、ということが、沖縄を媒介項にすることで見えてくる。しかし、同時に、そうした戦争体制の被害者である沖縄と、沖縄に対する加害者であるヤマトの私たちの両者が、日米両政府の被害者であり、ベトナムの民衆にとっての加害者である。そうであれば、沖縄とベトナムとヤマトの私たちとの連帯がどのようにありうるのか、という模索が進められていった。

そうした模索の向かい先として、ヤマトと沖縄を加害者であると同時に被害者にもしながら、ベトナム戦争を継続する社会構造を変革する、もしくは、そこからの「離脱」を図ることをラディカルに追求するという方向に進んでいった。それは、具体的には、日米安保体制の破棄を目指すという運動であり、また、沖縄の米軍基地の撤去を

求めるという運動でもあった。また、ベ平連は、アメリカ軍の脱走兵への支援活動も行っていた。脱走兵というのはベ平連の運動にとって象徴的な存在であって、ベトナムでの戦闘行為を強制されることから脱走兵を解放するということが、戦争を遂行する社会体制からの「離脱」として、積極的な意味をもつものとして捉えられていた。

そうした沖縄をめぐる運動の大きな転換点が 1969 年頃の時期ではないかと思うが、その年の 11 月の「ニクソン・佐藤会談」後に出された「日米共同声明」によって、72 年の沖縄「返還」が日米で合意された。それと共に、沖縄の米軍基地が「返還」後もそのまま残されることや、自衛隊の沖縄への進駐が決定された。また、沖縄がベトナム戦争と直結していることを象徴するのが、沖縄の嘉手納基地に常駐する B52 戦略爆撃機だが、それが沖縄にやって来たのが、68 年の 2 月頃だ。

巨大な軍用機が毎日、自分たちの頭上を飛び交って嘉手納基地で離発着訓練を行うということに、沖縄の人たちは大きな危惧を抱いていた。残念ながら、その危惧は現実のものとなり、嘉手納基地の敷地内ではあったが、68 年の 11 月と 12 月に、立て続けに B52 が墜落事故を起こした。しかも、当時、嘉手納基地には核兵器の貯蔵庫があると言われていて、B52 の墜落事故が核爆発を引き起こすのではないかという恐怖に周辺の住民は脅かされていた。

それだけでなく、B52 が連日沖縄から直接ベトナムに行き、大量の爆弾を落とすのは戻ってくることを繰り返していること自体が、沖縄戦の惨禍を味わった沖縄の人々にとっては、許し難いことだった。また、当時、アメリカの原子力潜水艦が沖縄に寄港することで、深刻な海洋汚染を引き起こすのだが、そうした状況に対する沖縄の人々の怒りが炸裂して、69 年 2 月に沖縄全島でゼネストが計画された。しかし、アメリカ政府や日本政府から様々な圧力がかかり、結局、ゼネストは回避されてしまった。しかも、総評といった、ヤマトの側のいわゆる「革新勢力」までもが、ゼネストを実行すれば沖縄の本土「復帰」が遅れるということで、ゼネストの中止に向けて沖縄の人々を説得しようとした。

そのような状況の中で、それまで見られたような、国民的・民族的な同一性に依拠してヤマトに向けて訴えるというスタイルは一旦に解体して、沖縄からヤマトへの強烈な告発や糾弾の言葉が登場するようになった。例えば、ある沖縄の女性は、次のように当時の「ベ平連ニュース」に書いている。

「日本政府を信じたいと祈るような気持ちで復帰の時を待ち望んでいたのだけれど、その私の気持ちに答えるには、あまりにもわびしく、あまりにもお粗末な内容だと悲しくなった。何故、同じ日本人、否、同じ人間でありながら、沖縄に生まれたという理由だけで、平和を、自由を求める事すら許されないのです。沖縄の人々を今度の戦争で殺したのは米軍ではなく、味方と信じた日本軍だったのだから、私は大和人(ヤマトンチュー)を信じはしない。」

そうしたヤマトへの拒否の声が、この時期の沖縄では、一旦に噴出したが、そのような沖縄からの声によって、本土の運動の側も自らのあり方を問い直さざるを得なくなる。例えば、71年2月の北爆6周年「市民集会・デモ」で配布されたビラでは、「沖縄を沖縄の人びとの手からとりあげ、自衛隊の基地とし・・・それが佐藤政府のいう『沖縄奪還』であり、『国政参加』だ」という政府批判の言葉の後に、「だが、わたしたちは？」という、沖縄に連帯しようとする運動の側が自らを問う言葉が続いている。そうした意識の中から、「沖縄を返せ！」ではなく、「沖縄を沖縄の人々の手に！」というスローガンが生み出されたが、そこに現れているように、沖縄の自己決定を支援するのがヤマトの運動の側の役目だ、という意識が共有されるようになっていた。

そのように、沖縄の自治権への支援という方向性が打ち出されていたにせよ、沖縄からの告発と糾弾の声にさらされる中で、沖縄とヤマトとの関係をめぐる思考が「加害者と被害者」という構図に縮減されてしまい、ベトナム反戦運動の中で沖縄とヤマトとの連帯を模索しようとしたことが、一つの隘路に入り込んでしまったことは否めない。率直に言えば、それが、72年の沖縄「返還」に至るまでの日本の運動の限界だったように思う。

社会運動・思想の越境的な共振と共時性

しかし、その一方で、非常にマイナーなものではあれ、そうした日本の運動の限界を打破するような運動が、間違いなく存在していた。その1つが、基地のフェンスを越えた反戦運動だ。つまり、当時、米軍基地の中のアメ리카軍の兵士たちと共にベトナム反戦運動に取り組むという、希有な運動が存在していたということだ。

これは、71年頃の沖縄のコザでの反戦・反軍活動のミーティングの様子を撮影した非常に貴重な写真だが、ご覧のように、そこに参加している米兵は全員が黒人兵で、そこに何人もの沖縄の若者たちが加わっている。普通に考えれば、沖縄の米軍基地にいる米兵と沖縄の人々とは厳しく対立する立場にいるはずだ。それなのに、なぜこのような関係が成立したかということだが、現在との大きな違いとして、当時のアメリカには徴兵制度があり、否が応でも戦場に行かされるという状況の中で、とりわけ、黒人や移民の若者たちが最も過酷な戦場に送られるということがあった。彼らはアメリカ国内で人種的なマイノリティとして差別・抑圧されていたが、アメリカの軍隊の中でも差別を受ける存在であった。そうしたアメリカ国家の内部での黒人差別の構造と、日本での沖縄人に対する差別構造は共通するものがあるのではないか。そうであるならば、そうした差別・抑圧される者同士として、戦争を止めさせるために共に手を携えて闘うということがどのようにありうるか、ということが真剣に模索されていた。

そのように、おぼろげではあれ、国籍や人種による分断を超えて、差別・抑圧の根源にある軍事体制を共に打破しようとする連帯感が、沖縄の人々と黒人兵たちの間で生み出されていた。そうした基地のフェンスを越えた反戦運動は、沖縄だけではなく、本土の運動でも取り組まれていた。

これは、埼玉県と東京都の境界上にあった米軍の朝霞キャンプでの反戦活動の写真だが、そこには、ベトナムで負傷した兵士を静養させて、再び戦場に送り出すための米軍の医療施設があった。その写真の中で、基地のフェンスの向こうからアピールを行っているのは、「大泉市民の会」という、当時のベ平連系の反戦グループだ。そのグループでは、朝霞キャンプの撤去を求めると共に、基地の中からの反戦運動への参加を、直接、米兵に向けて朝霞キャンプのフェンス越しに呼びかけることを行っていた。「大泉市民の会」では、朝霞キャンプに向けて、ボブ・ディランの歌や、キング牧師やブラック・パンサー党の反戦アピールをマイクで流したりしたが、それに対して、米兵たちが応答してくるということがたびたびあった。それは、必ずしも友好的なものばかりではなく、そうした呼びかけに対して、米兵が怒りを込めてフェンス越しに石を投げてくる、という形での「応答」もあった。

その他にも、米軍兵士と一緒に反戦のためのロックコンサートをしようという試みもあり、多摩湖の近くで、白人や黒人の米兵と、当時、ヒッピーと呼ばれていたような日本の若者たちが一緒に音楽を楽しみながら、ベトナム戦争や平和について語りあうというイベントが行われた。また、ベトナムでの戦況の悪化につれて、米兵が石を投げて応酬するということが減り、フェンス越しの反戦アピールに対して、ピースサインを向けるといった好意的な反応を示すようになった。そこにはかなりきわどい部分も含まれていたとは思いますが、そのように、沖縄とヤマトの両方で、国籍・人種の違いや、基地のフェンスの「内と外」という分断を超えた運動が間違いなく存在していた。

それと併せて、竹中労やNDUによる「文化闘争」についても、ぜひ、紹介したい。竹中労という人はアナキスト的な人生を送った人だが、彼は、「琉球共和国」という興味深い沖縄論を沖縄「復帰」の年に書いている。彼は、その本の中で、コザの街の娼婦といった沖縄の下層民との出会い・交流について思いを込めて語っているが、そのように、彼は、沖縄の運動からも排除されるか、忘却されている沖縄の下層労働者の視点から、日本「復帰」運動の欺瞞性を激しく批判している。

そうした彼の主張とNDUの活動とは重なるものがある。NDUというのは、「日本ドキュメンタリストユニオン」の略称で、ドキュメンタリー映像を作る製作者集団だが、実は、彼らは、早稲田大学の学園闘争を闘って、大学を中退した人たちだった。彼らは、「復帰」直前の沖縄に入って、膨大な映像作品を残している。

NDUは、第2次大戦後、大日本帝国がアジアから撤退して縮小していくという過程を逆にたどりなおして、そこに痕跡として残っている旧日本帝国の暴力を映像で記録している。例えば、「アジアはひとつ」というNDUのド

キュメンタリー映画では、台湾の原住民に会いに行き、原住民の老人たちがかって日本軍の末端の兵士として利用された経験を聞き出すのだが、その際に、老人たちの胸に「陸軍」という入れ墨が彫り込まれている映像が映し出される。また、その映画の中に、原住民の老人たちの一人が、「ああ、また戦争がしたい」とつぶやくシーンがある。つまり、原住民への差別・抑圧が厳然として存在する台湾社会の中で、戦時中、まがりなりにも一人前の兵士として認められたという思いが、彼らの心中にある。そのように、極めてねじれた形で戦争の記憶が思い起こされることの中に、いかに国家の暴力が折りたたまれているかということ、その映画は映し出している。

竹中労の沖縄ルポと同様に、NDUの製作した「沖縄エロス外伝 モトシンカカランヌー」というドキュメンタリー映画では、娼婦や、ヤクザ、台湾人労働者、集団就職の若者、混血児、黒人兵といった、沖縄の中の「下層」やアウトローと呼ばれるような人々を取り上げている。そこに映された米兵相手の沖縄人娼婦といった、沖縄の日本「復帰」運動さえもが目をそむけているような存在と沖縄社会との関係を緻密に読み解くことで、日本「復帰」へと突き進もうとする沖縄社会の中の差別や抑圧、暴力を可視化するという作業を行っている。そこから更に、日米両政府による沖縄民衆の抑圧を問うだけではなく、同じように差別・抑圧を受けている様々な人々を「横」につないでいくことが目指されていた。

その際に、先程も触れた台湾のような日本の旧植民地の人々の戦争経験と、現在の沖縄の経験とをあえて同時代のこととして「接続」させることで、日本「復帰」直前の沖縄の現状と歴史性を問いなおすことが試みられていた。そのように、竹中労やNDUは、アジア各地の被差別民や「窮民」と、沖縄社会の中に存在する多民族的な下層労働者を結びつけることで、日本「復帰」に伴うナショナルな統合化や国民的な一体感を打ち破るような「文化闘争」を敢行した、と言ってもいいだろう。

「あの時代」を私たちの現在といかに「接続」するのか

最後に、「あの時代」の運動経験から私たちが何を受け継ぎ、それを私たちの現在にいかに「接続」させるかについて、少しお話ししたい。

今日の私の話の中で、ヤマトが沖縄に対して行使してきた暴力を忘却することが、日本と沖縄の外に広がるアジアの国々に対して行使してきた植民主義的な暴力を忘れ去ることにつながっているという「二重の忘却」について話したが、そのことをいかに克服するのかということが、「あの時代」から私たちが何を受け継ぐのか、を考えるための1つの軸となるように思う。

沖縄の普天間基地の辺野古移設に反対する論者の中には、海外のグアムやサイパンといった土地への移設を主張する人たちがいる。「沖縄セミナー」の第1回では、前宜野湾市長で先の沖縄知事選の候補者だった井波洋一さんが話をしたと聞いているが、彼はずっとそのような主張を行っている。しかし、言うまでもなく、グアムにせよ、サイパンにせよ、その土地で現地の人々が生活を営んでいるわけで、そうした主張にはやはり、極めて危ういものを感じざるを得ない。

そのように、基地というものを、公害を発生するような一種の「迷惑施設」と捉える発想の危うさは、当時のベトナム反戦運動の中でも意識されていた。ベ平連運動の周辺にいた人物ではないかと思うのだが、大沢信一郎という人は、「基地の爆音やときおりの墜落事故などに対して、人々は『それは基地公害だからそれをなくせばいい』という考えにおちいりがちだが、はたしてそうであろうか。基地とは、簡単に言ってしまうと戦争のための手段の一つであり、戦争は大量殺人の方法なのである」と、言っている。

確かに、基地は移動可能な1つの「モノ」ではあるが、彼が言うように、基地は「戦争のための手段の一つ」である以上、沖縄の米軍基地を問題にするということは、単にどこに基地を移設するのかということに止まらず、戦争のための手段として基地が存在しているような世界のあり方それ自体を、問わなければならないはずだ。そのことを不問にする反基地運動は、思想的にも不十分なものである、と言わざるを得ない。私の知人の研究者の崎山政毅は、「社会関係としての平和」や、「接続する構想力」ということを言っているが、先程触れた基地のフェンス

を越えた反戦運動も、米軍兵士という敵対的な関係にある他者との「接続」を通じて、関係としての平和を創りだそうとする実践だったように思う。

「あの時代」の運動経験をいかに受け継ぐのかを考える上でのもう1つの軸として、「沖縄問題の当事者とは誰か」という「問い」があるだろう。今日の私の話にもあるように、そのことに当時の活動家たちはずっと突き当たっていたのだが、その「問い」は、今でも残り続けているように思う。

沖縄出身の研究者の田仲康博は、「そもそも当事者性が〈場所〉や直接の記憶に根ざすものであるとすれば、たとえば私は自らの身体に刻印されていない沖縄戦の記憶とどのように向き合えばいいのだろうか」、「当事者性とは、ある出会いをきっかけに始まる〈関係〉のことを指すのではないかと今の私は考えている」と、言っている。そのような視点から、当事者性ということをも改めて捉えなおす必要があるだろう。また、鄭暎恵（チョン・ヨンヘ）という在日の女性の研究者の、『『考えなくて済む』状態が特権であり、かつ、裏を返せばもっとも奪われているような状態ですよ。自分達が気付くためのきっかけを1つ1つ丁寧に芽を摘まれてきているわけで、それが「マジョリティ」と言われている人たちの特権の実態ですよ。』という言葉にも、大いに考えさせられるものがある。

そのように、例えば、沖縄との出会いによって、この世界の中の問題を「考えなくて済む」ようにし向けられているという状態を脱して、沖縄の闘いを私自身の闘いに「接続」しようとすることで、私の「当事者性」が新たに生み出されると言ってもいいのではないか。

それでは、そのことをどう具体化するのか、ということだが、かつての運動であれば、政府の転覆といった大転換を目指すような、いわば、「大文字の革命」が信じられていたように思う。それに対して、「小文字の革命」とでも言うような、その場で具体的な個々の関係の変革を目指すような実践を創り出すということがあるのではないか。つまり、「いつか大転換がやって来る」というように、「革命の到来」を未来に先送りするのではなく、「まさに今ここに革命が起きている」ことを確認することができるような実践を積み上げていくことが、求められているように思う。

そうした実践の1つの例として、私が仲間と共に新宿駅東口のアルタビル界隈で行っている、「アルタ前大学」というアクションを紹介したい。新宿駅東口のアルタビルの前のスペースというのは、よくテレビ番組のロケでも使用されるような小さな広場になっているが、そこは、私や私の仲間たちが普天間辺野古移設や、高江の米軍ヘリポート建設に反対の声を上げている「新宿ど真ん中デモ」の出発・解散場所になっている。そのアルタ前広場を「アルタ前大学」という名前で一時的に「占拠」して、「路上解放ティーチ・イン」を行っている。そこでは毎回、講師を招いてアピールを行っているが、新宿駅界隈の繁華街という消費空間の中に、突然、「アルタ前大学」という、沖縄戦や植民地主義を語る声が響くような異質な空間が出現することになる。

面白いと思うのは、「アルタ前大学」を行っている時、そこに突然、東京に出張中だという労働組合の活動家の青年がやって来て、沖縄の状況について熱心に話し出したり、通りがかりの若い女性が、「私は沖縄出身です。本当に怒ってます」と言い置いて立ち去っていくというように、思わぬ出会いや飛び入りの参加がしばしば、あることだ。それは、ある種のマイクロな関係性がある場所で生み出されるような試みだ、と言ってもいいだろう。そうした試みが、その場にいるそれぞれの人の胸の中に、何か「ひっかかり」のようなものを残しているはずだし、マジョリティとして「考えなくて済む」状態に置かれていることで何を奪われているのかを問うような契機になるのではないかと、と思う。

また、「アルタ前大学」という異質な「言論空間」を新宿の街頭で創り出すことによって、ある種の「風景の裂け目」（田仲康博）がそこに生じている、とも言えるのではないか。鳩山首相（当時）が名護市役所を訪れて名護市長と普天間基地の移設問題をめぐる会談を行った際に、ほんの短時間だが、市役所の外で雨に打たれながら抗議行動を行っている人たちの姿を、テレビのカメラが捉えていた。その時、抗議する人たちが手に持つプラカード上の、「沖縄差別」や「植民地主義」といった、通常、決して放送されないような厳しい批判の言葉が、テレビの画面に映し出されていた。それも、ある意味での「風景の裂け目」と捉えてもいいのではないか。

そうしたことは、とりわけ、3月11日の原発事故の後、至る所で生じているように思うし、「アルタ前大学」といった、小さな「路上解放」のアクションにも、この国の街頭で「風景の裂け目」を生み出すのに十分な可能性が孕まれているように思う。

「フリートーク」での論議から

参加者 A :大野さんたちが行っている「新宿ど真ん中デモ」では、多くの「フリーター」と呼ばれる若者たちが関わっていると聞いている。彼ら／彼女らは自分たちが直面する「生」の保障の破壊の問題と、基地の押しつけによって生きることの根底までもが脅かされている沖縄での状況の両方を、重ね合わせて捉えようとしているように思う。その一方で、この間の沖縄での、「自己決定権」の樹立を求める運動を、沖縄の「フリーター」や不安定労働者の若者たちは、どのように見ているだろうか。

大野:そのことは、私自身が知りたいことなのだが、私が知っている範囲で、最近の沖縄の若い人たちの全体的な雰囲気について言うと、沖縄ナショナリズムや、ヤマトへの敵対心とでもいうような傾向が高まっている。「ヤマトの基地はヤマトに持って帰れ」といった発言がよく聞かれるし、中には、「東京の人間は、沖縄の基地を東京に誘致する運動はしないのか」と、挑発気味に言うような人もいる。

一方、「癒しの島」といった宣伝文句に惹かれて退職後、ヤマトから沖縄に移住しようとする人は少なくないし、本土の社会にうまく適応できないような若者たちが、バックパック1つで沖縄に多数来ている。そうした状態の中で、「沖縄にやって来るヤマトの人間が、ただでさえ少ない沖縄の人間の仕事を奪っている」ということが、数年前から言われるようになっていて、沖縄の人たちと沖縄在住のヤマトの人間との間に、ある種の対立が生じるようになってきている。

他方では、普天間基地の移設予定地の辺野古や、米軍のヘリポート建設が強行されようとしている高江には、ヤマトの大学生や若者がたくさん来ていて、現地の人たちと一緒に反対行動に参加している。那覇に、そうした現地での抗議行動を仲介しているゲストハウスがあって、その1階が、辺野古や高江の映像を映したり、現地での座り込みから帰ってきたばかりの人たちの話を他の利用客も聞いて現地行きが即座に決まってしまうような、フリースペース的な空間になっている。それをヤマトの生きがたい若者たちと沖縄との連帯行動だと簡単に言ってもいいのか、まだよく分からないが、そうしたことがあるのも確かだ。

参加者 B :今回の沖縄セミナーの資料として配付されている大野さんの論文の中でも、竹中労について触れられている。彼と太田竜、平岡正明の3人は「ゲバリスタ」とも呼ばれていたが、そうした3人の関係や、竹中労と沖縄との関係について、もう少し話してもらえればと思うのだが。

大野:竹中労や、太田竜、平岡正明の3人は、当時、同じような発想に立っていた。つまり、「辺境最深部」や社会の中で周辺的な位置に置かれた人々こそ、社会変革の主体だとして、最も抑圧されている存在を探し求めて、そこにのめり込んでいくというところがあった。私のその論文では、竹中労の沖縄論のもつ可能性を高く評価しているが、それは危うい部分も含んでいて、それは下手をすれば、「ヤマトの革命への道は、沖縄にある」というように、自分の思いや情念をそのまま無理に相手に押しつけてしまうことにもなりかねない、という部分も含んでいる。

ただ、竹中労の沖縄への熱い思いを肯定的に受け止めている沖縄の人たちが、今でもたくさんいて、今年5月に私が沖縄にいった理由の1つは、竹中労の没後20周年に合わせて彼を偲ぶ島唄のコンサートに参加するためだった。私は大阪の出身だが、大阪市の大正区には、沖縄から移住してきた人たちのコミュニティがあるのだが、昔は、沖縄人だということを知られて排斥されるのを恐れて、本土では島唄を大っぴらに歌えないような雰囲気があったと聞いている。しかし、彼が島唄に光を当てて、そこに豊かな文化があると訴えてくれたことで、自信を取り戻したということも、そのコンサートでは多くの人たちが語っていた。竹中労は、たくさんの島唄のレコードや島唄コンサートをプロデュースしているし、いくつもの島唄論も書いている。そうした彼の音楽面での「文化闘争」についても、今後、研究課題としたいと考えている。また、彼は、「沖縄独立党」との交流もあるし、「反復帰帰論」を唱える沖縄の知識人たちともつきあいがあって、侃々諤々の議論を行っている。そうした沖縄とのつながりも、彼の中にはある。

参加者 C :私は仲間と共に、能登半島にある能登原発の反対運動に関わってきた。残念ながら、能登原発の建

設は強行されてしまったが、実際に現地に何度も現地に行き行って感じるのは、原発をどうするかというのは、自分たちの生きる地域の未来をどうするか、ということであり、その意味では自治に関わる問題だということだ。それは、基地に反対する沖縄の人たちが、自治や自己決定権を唱えるのと、共通するものがあるように思う。能登原発を造ったのは、北陸電力という富山に本社のある電力会社だが、原発の問題を考えることは、自分たちが生きるこの富山をどうするか、ということでもあるだろう。「3・11」以降の状況も、そうした自治という視点から考えることが求められているはずだ。

大野:私は、今の発言を興味深く聞いたのだが、つまり、自分たちの地域をどう自治するか、ということが、遠くの前線地域の自治を支えることにもつながるということだ。それは、沖縄の問題にもつながる。つまり、私たちが自分たちの未来に関わる決定について、政府にゆだねればゆだねるほど、沖縄の自治は破壊されていくことになる。また、今の発言を聞いて、「アルタ前大学」の取り組みについても改めて捉えなおしているが、初めて顔を合わせた者同士がその空間をどう創り出すのかということも、1つの「自治」だろう。そのように、自治とは、県や市町村といった地方自治体の区分とは重ならないものと捉えた時に、様々な連帯や関係性の可能性が広がっていくように思う。

参加者 E:「アルタ前大学」というスペースを創り出すことも1つの「自治」だという話だが、それは、新宿駅界隈の街頭が消費空間であることを、一時的にせよ、「破壊」することでもある。そのように、自治ということは、新しい社会関係の創造と同時に、既成の社会空間の破壊・変容を生み出すものだ。富山駅前にも、ちょっとしたオープンスペースがあるのだが、警察がそこを自由に使用することを非常に警戒して、規制しようとする。そこを突破する路上解放的なアクションも、私たちの自治の拡大に向けて必要なように思う。

参加者 D:60年代末から70年代初頭の沖縄には、日本「復帰」に反対した「反復帰論」者と呼ばれた人たちがいた。それとは別に、日本「復帰」に反対していたのは、当時、「Aサイン・バー」と呼ばれていた米軍兵士相手の飲食店で働いていた人たちだ。彼ら／彼女らには、それこそ、沖縄がアメリカと日本のどちらに支配されている方が金儲けできるのか、というリアルな計算があったと思う。しかし、それから間もなくおきたコザ暴動では、店の奥で火炎瓶をつくって、街頭で米兵に投げつけたのも、そうした人たちだ。そういう意味では、基地に反対か、賛成かといった「二分法」ではないところで生きているのだと思うが、そうした人たちの存在を、沖縄や本土の運動はどこまで見据えているのか。それは、別な言い方をすると、沖縄の基地問題や、日米安保の中での沖縄の位置をめぐる論議はいくらでもあるが、その一方で、沖縄社会をまともに論じたものを見たことはない。

沖縄の作家の目取真俊が書いた「希望」という掌編小説がある。沖縄で、「米軍兵士少女暴行事件」のような基地に変わる事件が起きる度に、数万人規模の県民集会を行っても、何も変わらない。そうであれば、「最低の方法だけが有効なのだ」ということで、アメリカ人の幼児を誘拐して殺害し、自分もガソリンを浴びて焼身自殺するという、衝撃的な内容のものだ。先ほど、沖縄の「フリーター」たちが、沖縄での運動をどう見ているのか、という質問があったが、そういった人たちがどこにいるのかがよく見えない。その掌編小説に示唆されているように、基地か、反基地かという「二分法」では割り切れない位置にいて、毎日、深い絶望と淡い希望の間で揺れながら生きているような沖縄の「フリーター」たちの目線に立って、現在、沖縄がどのような状態にあり、どこに向かおうとしているのか、を表現している沖縄社会論は、未だにないように思う。

大野:淡い希望と、深い絶望の間で生きているというのは、沖縄の「フリーター」と呼ばれる人たちに限らず、現在の私たち自身の状態でもあるだろう。この社会の中で、私たちは自分で決めて生きているように思っているかもしれないが、実は無自覚なまま、様々な制約に縛られて、極めて狭い枠の中で選択しているということがあるのではないか。そのように、「考えなくても済む」という私たちの日常が、実は極めて不自由で、思考力や想像力を剥奪された状態であることを気づかせてくれるのが、文学や音楽といった芸術の「力」ではないか。更に言えば、「アルタ前大学」といったアクションや街頭デモも、今あるものとは違った多様で豊かな関係や社会性が存在しえることを示すためのものではないか、と考えている。